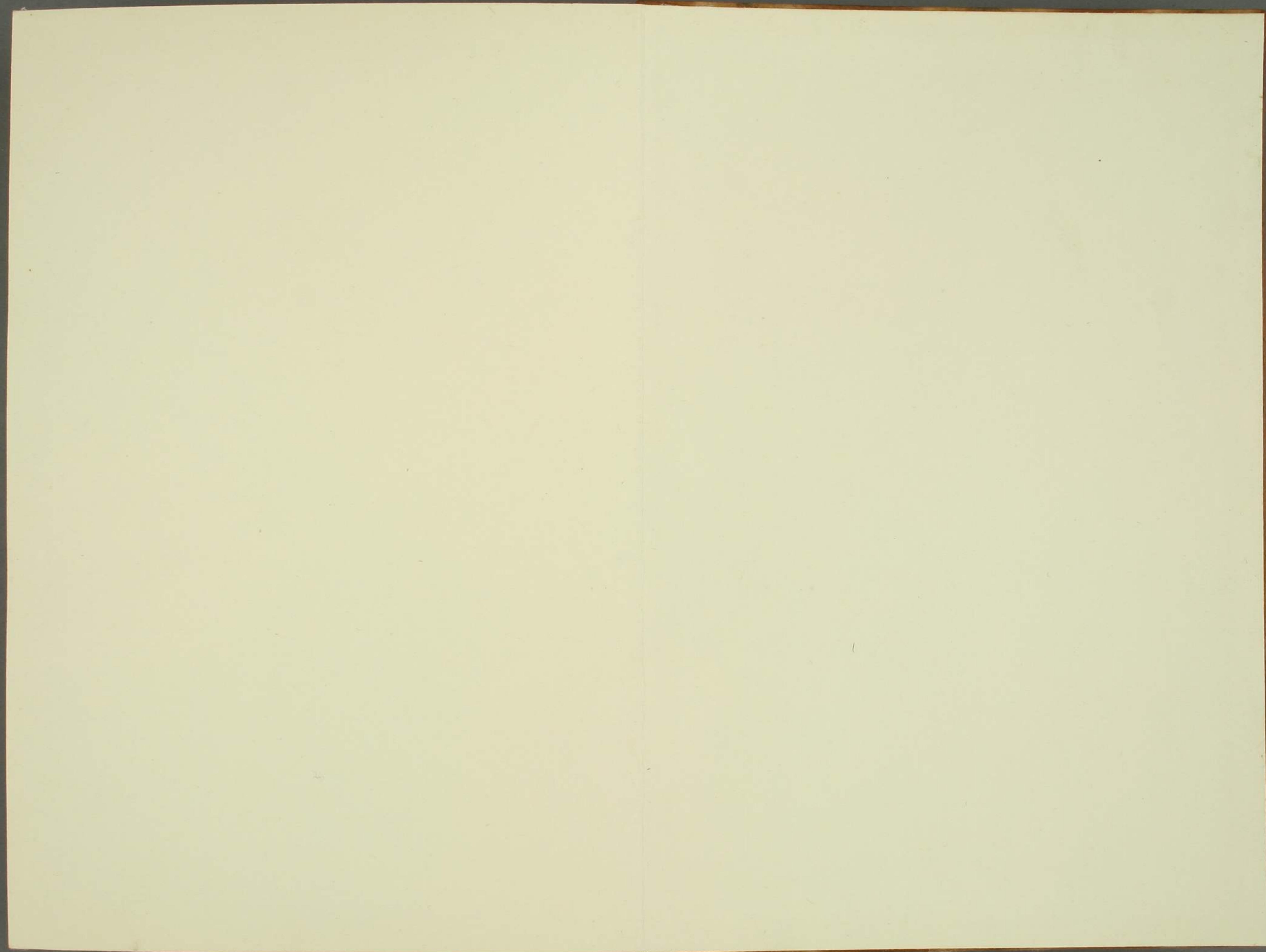


乾いた心上巻 正宗白鳥自筆草稿

特別
8052
1
~14

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100





十八行通鑑

早通し
二直起し
1
2.0
通

卷之三

1

早通

正印三員起

20
道

あみよはまのきぬ子の情事を聞いて吃驚
その夜は興奮して眠らなかつた。自い
しめた。云ふよりは年下で、何時も子供らしくことを
云ひつて、分がよつて、はつて、
の女か、つかつて、よくげらへ笑つてゐた
めでて、の母の田目を晦ませて自分でまを定
めても、祖母の男の光へ身を寄せたといふと
とは、容易に信じられなかつた。さういふ大

乾

あつた。女学校卒業後直に又上京した同窓。
仲のよかつた友達から之をりて消息は、
周囲の反対のためか挫折しがれ大抵の決心
由を述べては繼えず燃え上りせたのであつ
た。

「前より嫁入り仕度金は予やんと別にしてあ
るから、強いて學問をしたいのならもやうだけ
は修業金を出してやつてもいい。しかし、いざ
の生活は自分の働きでやう無事やなさん。

乾

と思つてゐると、かねてほんやり心の聚おと
はつてゐたがみよ自身の将来がいしと案
せじや出した。家名ださは近郷で一二せきつ
ておても、身代は云ふ足りない山村の旧
家がみ生れた彼女は、生中田金の女学校を通つ
たため、泥臭い田舎の家の主婦す
まやた諸方の縁談を管たく断拒め散らした
揚句、根気よく父や兄を説いて、やうやく
みの東京の高等女学校へ修業を出て来たので
ある。

（）

乾

落葉したら死ぬばい。卒業後自活が出来なかつたら死ぬばい。と、上京前後には單身を極めてゐたりたつた。そして、保証人となつて買ひた遠縁の叔母の家から通學し出してからは、傍目も觸らずすら書字課も隠してゐたが、一二年経つ間違は将来の光明よりも不安な影か月の先ずさらつも出した。田舎で愚図々としてゐた間はずしてゐた。二年卒業期の遅れるて教壇の立つて独身で一生か渡るがとが多め

乾

結婚するもして自分との子で仕度をして、決して風親兄弟を富てみしらずやむ。この覺悟をしとするかと、父親は出前まで嚴かに言ふ。聞せた。
東京で病氣したつて遠方だから捕まつてややせんぜ。えこか。男の子で漁師か、女や東京の學校へ行つためりはないのよ、女性たゞ行かうといふのなら、確かりと量見を極めとり。と、長兄も云つた。
おみよは死を以つてこゆす當つた。試験み

13 乾

君の縁つごきの吉村一家とも自然見知り合ひ
みはつてねたのりで、きぬ子の意外な事件を有
振やた新聞のやうに軽く聞流してはおらず
なかつた。

「みよすやんなんかは本確りしてゐからい
と云つて、吉村の祖母の氣の毒な境涯を細々
詰しこ聞かせつけられして興味も感じないで碌

聞きかせたが、平生きり眼鏡を

9

12 乾

少心細く思はれてゐた。殊み田舎みおた時分
から可度哉り度の強し近眼鏡を掛けなければ
貴物が遠めなかつた彼女の目隠の、この頭ふね
つて暮るしく悪くなつたことが、彼女の頭の
中をます／＼暗くした。

~~従姉尼~~ ~~おば~~の家へは食費を拂つて部屋を借り
てゐるばかりで、殆んど打明けた強がりし
ないのだが、従兄の家族とは
ひみ行つて、人のよそゝは其處の妻君とい
は誰より娘意をしてゐた。直ぐ近所の車
は十行廿字

8

六十三年もなるのよ。十五の歳で嫁よめに行つて十六で母はなはめ子供こどを生うんだりですつて。
体不思議たいふしきぎなやうだけりび、昔むかは毛けが當あり前まだ
つたのですつてね。眉まゆを剃そるつて 鐵くわ繩くわねをつけ
ねたのでせ。四十五よ十六じゅでも 偶たまごは學者がくしゃで政治せいじ
家いえでひびひび始終しよつう子分こぶんを集あつめて酒さけをく飲く
へ演説えんせつか何かしも出歩であるへたり 飲くして、家の事
はんかはんかとも搆くはない人ひとたつたの。お國くにのた
めたり、土地ちぢを自じ分ぶんの繁盛はんじやうさせられたのよ
は、骨ほね身みを惜かまないのを自慢じまんして、辭ことと妻め

度どの事件じけんが絡からんで來きたとめみ、自分じぶんと年輩とねんばいの
吉よし村むら一家いっかの内幕うちまぐら活はき俄わかみ往むか
意おし出だして、呑の込みぬ荒こう唐とうがあると趣おもしろいん
み問といたりした。
「あの祖母おばあさんは苦勞くらうしよこの母おへ生うれて來き
たやうなもりだと思おもはゆてよ」と、おまきは祖母おばあ
母おの噂うそをするたゞは極きまり文句もんくのやうみ先づか
3云いつた。
「去年きさが本卦ほんが画かりたつたから、今年ことは

17 乾

て、西偶アリふ死シテはやたのですつて。
 祖母おばあセトが何な。父ちち久江タタケ
 つてゐのが、久江一人娘むすめほのよ。祖父おじい父ちち
 が跡あひだをたかささの頃頃は女学校じょがっこうへ入はる事ことはあま
 りなかつたのす、娘むすめ少すこし間まから學問がくもんをは込こ
 んで、西洋せいわ人の學校がっこうへまで入はりて修業しゅぎょうせせら
 の。おみよせん見たみたいよ。教師きょうせいの資格しごくを身みれ
 つけさせたさせたとですよ。財産ざいさんを残のこす代だいりよ女めの一
 人立たつて文ふみと暮暮らして行ゆけるやうと思おもふ
 つてゐたのでせよ。娘むすめを教師きょうせいとして養いくよ
 す。

13

16 乾

子このことこは渋淡しづたんだつた。冷淡れいだんかやないよ
 やは当地ちちよのためや又他人ほかひとのためよ盡つくしくしへや
 つてゐかるから、あやが明日あした死死なまとめ、あ
 前まへ達たつか路頭ろとう迷まよみやうなまよとはなしと、自分じぶん
 ではそろ云いつてゐたのですつて。でも、
 前まへ達たつか路頭ろとう迷まよみやうなまよとはなしと、自分じぶん
 なんか當あてみはるものもあやましいわね。祖母おばあ人ひとと他ほか人ひと
 せんは帶おを解ほどいて寝ねたことことかないといふ様よう
 くらゐよして忙いそがしく思おもひも心配しんぱいは思おもひむせん
 くくし盡つくしして、一人娘むすめが年としころみたつ
 小から樂うきが出来できよろといふ時とき今は
 12

19 乾

女を繰返し、遺言したんですつて。この遺
言の力で祖母さんは無理も生きてるやう
な思ふわ。子供は継母の手もは決して持つて、誰
か何と云つても遺言を褚よ取つて動かない
の。心柔い人のや云ふてゆく用ゐ
る祖母さんだけ、久江の遺言を云出すと、大
きなよんですよ。だから、今朝鮮へ行つて、
大坂ば金社の車役今までばつてゐる章吾さん

18 乾

婿さんを取つた時は祖母さんは大喜びで、め
ままで樂隱このあ婿さんは働きのある人だつたから
居たと思つてます、苦勞ひがりして生れて来た人す
ば、何時まは、久江ひさえさんか三さんめ目の子供
は盡つくきぬものね。久江さんか三人目の子供
を生んだ後で肺を患うつて亡くなつてから、
祖母おばあさんは苦勞ひがりつたのはかつたの。
のよ。久江さんは臨終りんじゆの間際まざゆに神じん老母こじょ
の手てを握つて、子供こどりのことを頼たのむて、こやだ
の時分ときかのことをはなめよく見て知つてゐ
る。久江さんは臨終りんじゆの間際まざゆに神じん老母こじょ

21

乾

が、子供を朝鮮へ寄越せといふに云つて来て
 め、お叶ばかりはぞろしにも聞入らないのよ。自
 分の寶子を自分の膝下へ呼んで祖母せんよ
 は隠居料を送つて安穩み暮せると云ふ。みんす
 かり、章吾せんの言分は誰せが聞か
 たのだけど汝。遺言を生命みしてゐる祖母そ
 んはどうしても得心しない。歸覲なさい。朝
 鮮かうの僅かな仕送りだけを當てよ、下女を
 やへ使はないで、三人の孫孫セモナヘ學
 行へやつてゐります。先日も御行つて見ゆ、
 ておひらひらと云ふと、腰がだる
 いたの肩が凝るだりと書いた
 となし、もやだからう子供を比方へ寄越しな
 さいと云つて來るのみ極つてゐるから、朱の
 は一言も自分の本身體の苦勞なんか彼方へ

20

が、子供を朝鮮へ寄越せといふに云つて来て
 め、お叶ばかりはぞろしにも聞入らないのよ。自
 分の寶子を自分の膝下へ呼んで祖母せんよ
 は隠居料を送つて安穩み暮せると云ふ。みんす
 かり、章吾せんの言分は誰せが聞か
 たのだけど汝。遺言を生命みしてゐる祖母そ
 んはどうしても得心しない。歸覲なさい。朝
 鮮かうの僅かな仕送りだけを當てよ、下女を
 やへ使はないで、三人の孫孫セモナヘ學
 行へやつてゐります。先日も御行つて見ゆ、
 ておひらひらと云ふと、腰がだる
 いたの肩が凝るだりと書いた
 となし、もやだからう子供を比方へ寄越しな
 さいと云つて來るのみ極つてゐるから、朱の
 は一言も自分の本身體の苦勞なんか彼方へ

乾

卷之三

知らうせたってはあ
曾日ぼろく。流を落とす。
も貰泣きしやつた
あまきはお村の祖母の
親類縁者との交渉を
はいとこりを補つた。
よ畠舎から移転した時
て買取つて、東京へ
よなつてゐる飯倉の家屋敷は、
今では唯一の財産

乾

ところへ落おちて、はつきりした錯着はつかないの。
だから祖母さんは好みで苦勞してよん
だからつゝ、親類の中みはもうそいを投げて見殺
しよする気でねる人めありますよ。；もこ
へ持つて来て、きぬすやんが勝手に祖母さん
の側にはかく逃げ出したりしてたんですもの。
見たてかと朝鮮の方で祖母さんはそんの元氣
だから他の方よりよろしく預けて置けばいい強
く出て来たから、祖母さんはそんの元氣みし
立たんからやめたりましたか

2

249 乾

よこへを詫したりした。
「氣の毒は祖母さん。」
おみよは甘いやうな
な聲音でかび歎息して、もんは不仕合せな
老母はぞかして慰めて上げたいやね。
の人は何故打やつとくんでせ
相次ぎ打ナヤとケヤしないや。
親類中ではま始めに始終
た間着のあつた揚句は、自分め朝鮮へは行
かない孫を三人とも父親の航へはやはい
と頑張るんだから、4遍回つたつて詫は一つ

20

「さぬきやんは祖母さんの中も知り合いで随
分無事へたわぬ
あみよはかう非難して、おまえと二人して
男の誘惑を生む想像して強
り合つた。自分で自分の宿へ歸つてからも、五蠅
の電気の下で、復讐する腹せいため
を休めながら、誘はせたまゝよ隨つて行つた
がきぬの心根は浅草花屋と無難作み呆れた
り、誘惑のとく文字ふ含ました樂いと怖えた
思ひを遊ばせたりしてゐた。」が、

29 乾

ける心を努めて押鎮めて、学校から帰ると直す
 いよい机に向つて、夜も遅くまで起きぬる。
 國漢文の筆蹟がよくはしと云ふ注意を
 帰り受けたことがあつたので、この
 学課の復習は持て身を入れた。そして、
 今年は休暇より歸省しないことよ極めてゐた
 のだつたが、食費を拂つて宿まつてゐるゝ過
 もない故の家で長い休暇を送る気は
 かつた。旅へ出ることには高更出來なかつた
 が、東京を見物して

28 乾

自分の年齢が顧みられた。
 てから上京するまでの間、(月日)
 が乞うろの惜まや
 出した。二十三、二十四、二十五と、か
 は三十までの數を指せ折つて數へた。
 (三) 24
 頭の痛が(月日)梅雨時となつた。お母さんは學
 期試験の近づいたびより奮して準備と處するのを
 例として、今度の一月も前からいら
 落葉を散らしてゐる
 自分の家で(月日)無駄月日
 みよ

31 乾

度忙しい時間割いて、
収て、夢のやうな考へを眞面目み口に出しこ
あまきと相談した。
貴女は今からんは貪食たらしく眞似を
しなくつてめうこやない。と、あまきは少
し、涙で云つた。
「おのれの力試して見て下さいんですよ。お金は
つかひりでゆくへんだけれどおまよは鄙劣
せうみ思はやまいとしてから云つて、休暇の
間だけ子供と教へ本を書いてやるとが、筆

30 乾

まゆてねたほどだから、愉快な銷夏の方は
思ひつかなかつた。
自分も出来て仕事があつたし、夏の
二月の間勵してしくらでも金を儲げて
見たいと、去年までには夢とも思はなかつこと
思ひを馳せた。
姉さんも頬めしら何かいくは事を搜
して下せらなしでせろか。自分の力で出来て
はずれば、なんな詰らなしことでめやつて
見る気になつてるんですかねと、試験前の一
回(た)

77 乾

めだや。男兄弟の中なかで育つたから、子供の時ごど
 から針はりを持つ術すべなんぞ知しらないで通とほつて來きた
 のよ。こやuccの頭かぶは目めが悪いくて、
 おみよは目のことことを詰はなが觸ふゆると、厭いやな氣き
 がして、俄とつか口くちを噤つぐんだ。親しゆしげの起おきしない
 叔母おばの家いえゐるよりは、従兄いそぎの家いえ置おきいて貰もら
 み向むかつて望のぞんでゐたので、金かな仕事わざが

78 乾

記きでわするとが、和わ相應あうな仕事わざはないでせぞ
 か。二月二月何なもしないでゐるが、退居たちくするが
 ゼゼし、時間じかんの不経済ふけいしたと思おもつてゐる
 事ことは隨ま分ぶん溜たまつてゐるから、和わの家いえは雑物まつものは
 買めひたいと思おもつてるんだけど、
 ナナよさやん
 まるんまん詰つらないことをお顔おほめにする譯わけよは行は
 かないしは
 どんどんな
 あチあチ傳伝へへゆゆし
 先さきか無な用よだから、籠裁とうぱいは全く駄だだが
 いんいんですげげ、和わは手て

33, 乾

「どうしたる幸福なのが人間は分らぬも
の収と、やがて呆けた顔して云つた。心も
ないかせ辞の云へないすみよは、
み窮した時は、空景り見て他の方を云つ
て紡うせるのが癖だつた。
「臺盆仕事」金仕事で日暮らしてゐるが
でも何でも一藝を身につけて置かなければ、將
來か不安心だと知りて思ふことがある。こ
の頃は婦人歸流なんが、えらし人の意

31

34, 乾

出來れば、毛を取柄よ、この夏季休暇中
れでも此方よ来ておられるのみ、平生は念
頭よ置いておながつたが、業の無署用
が残念と思はゆた。
「あなた貴女みは立派な學問、のがて資格が取れる
んですもの。」
「あしてお詫び申す。」
「お見えたでせ？」
「まさきは謹遜したつもりでそろ云つたが、お
みよは敢てお詫び申す。」
「貴女は馬鹿はやう

30

37 乾

た。で、まかおみよを早く縁付かせた
 よくは口吻を読んだりするが、すの女は中々
 銚婦なんかするゆうです。と、一図ふんと
 てねた。すか。えらい考へを持つてゐるんですもの
 のを例としてねた。」
 銚婦はとかとがくみ葉子はおまき自身の不平や
 反感がいゝらか否まけてねなしではなかつた。
 して、またが微見かしてゐる嫁入りのことをか
 みよと傳へる時分、ほんの店奥として取扱
 ふふ過ぎなかつた。

33

36 乾

見るを讀むたひと胸がどきんとするんですよ。
 みよすやんとお交際してたためる自然と感化
 を受けたのかゆ知りはないやつと、おまきの
 言葉はお産なりではなかつた。
 令す育従して銚婦した自分などよりも、自活
 のお金を立てて男同様の隣間をしてゐるおみ
 よ。お金を立てて銚程確りした聲明はきせんは
 せ詫の中よ抑まけたり、西洋の力強の強を聞
 かせたりする。自分のサ無學が気まずつ
 てゐた。一すこした英傳

36

39

乾

試験が済
んが、友達か一歸り仕度をした
(三) 34
轟後ハタケガラの後アフタで少カツし訪問ハサウエイを約束アコスルして、其家カミイマを出ダシルた時トキ私は、でゆ、いくらか頭アシタマの軽カガくなつたの
を覺アハえた。その日の訪問ハサウエイの目的メテは彼カミとめ達カミタツせ
りやなかつたが、おまきの親切シンセツで、はな聲音ボイスを
暫シテ聞ヒかれて、机シキの前マサニで、はに晴ハシナいた
帰カムると直シテに不懷ハナフして、はな端書ハガキを出した。

38

乾

卒業ハツギヤクセヘスルば、教師ケイシ直ハタツによひみなすし、
紹始ハツシレやうと思ハシムへば、外交官イエイガウのまんよでモばか
るの時ハタチよはつて、セリ奥梅オクメイみてぬなげるムです
もの。今ハから傍ハタチでかせつかりをさせむ。かくす
るみは及ハシマばねいや取ハシマと、頭カミから否空ハシマして
かへつてゐた。
おみよみはる中ハタツが醜氣アシキなかつた。先方ハカルで勧アシタマ
めもしはい録談ロクダンを比ハシマからシ舞ハタツ出しして元ハタツ澤ハタツよ
は行ハタツかなかつた。
この後の吉村ヨシムラ一家イチヤクのことなども聞いて、試ハサウエイ

101 乾

先ばかりり氣樂なことを父兄の前で云ふのは
堪へ難かつた。一ヶ月はめう一年でせの先生
と、父親み詫かゆるのが怖かつた。一月給は何ほどや
極て身體を壊して死ぬるまでゆ、今まの學問を遺徹すよ
り外ゆみ右よりは道はなし、試験夜
度まで悪くするまでゆ、今まの學問を遺徹すよ
りの頭を机の上に置きて目を瞑つて、この寂
い道を手懶りなげ見てねた。
試験かお済みなつたのなら、明日の晩泊

100 乾

のを見ると、居残りか寂くなつて、決心が
動搖したが、辛うじて諦めをつけた。一晝夜や
汽車を乗りつづけるのは、頭痛持のすみよ
は容易はしね苦く痛であつた。多勢の男の子の
中の女の子として別して可哀かつて哭する母
親と會ひのは山々だけれど、有餘りはない
身代の中から學資を割いてゐる父兄の前へ出
るのは後見たかつた。去年の夏すは東京
をして振かず遊んでねらひたけれど、今年は
前途の重い責任のか五駆を壓しげねるので、口

乾

の趣味がなつかつたので、進んで習はせりはし
はかつた。そして、せせ居であや浪花節であ
も遊藝の樂みた。おたと時から今まで、たゞの一
多才の好奇心。名前だけ知つてゐる有樂庵へ出
掛けたのだから、名前だけはなかつた。とほ
多くはなかつた。たゞの有樂庵へ出た。

「明日の晩はせせの街の従兄さん達の有樂庵へ出た。
へ行きまよと、叔母は向つて幌ふ隨へそ

3 よ詰して羨ましがうけた。

49 乾

39

七

掛けりで入つつか遊ひよしやいませんか。有樂亭
の演藝倉へまゐる筈よなつて居り
すので、お獻ではけりばお誂へしたと、主に
人か申して居ります
あまたの端書きの文句は、寂しい道でふと
懐しき人よ厚つたやうよ、お
くした。少く時祖母せんよ高い山とか、が前
を待すとわか薬子を餌よ鳥籠古セ
中食て、三味線の手ほりはしへ貰つたの
だが、祖母も以外のものは家の者よは庄く遊藝

2" 38

乾

め直す度をつくつた。
「早や過ぎてか邪魔よなつて」と、おみよは立つた。
案立つたままで云つて、風呂敷を開けて
英文典を出しつゝ、ヤミ思つて、和専用
今ナタはふるい書物を持つて來たの。
彼方で黙つて勉強するがちだま
きやうしておますよと云つて、向への縁側がはだま
行つて、柱の側によじがんで、辞書を前に置き
筆は手本を讀んでは考へた。
日遊けの餘りは文典が棚から屋根へかけられ、
もののは葉影を逃がして大

卷之三

106 乾

輪の紫陽花の匂は、花の色が見られた。
裾の臭気のすゝる叙事の家の
三疊の宿で机に向つてゐる時よりは、どう
ほゞ気持よく静か書物よ親しむるか知りは
かなかつたが、おまきは仕事の手をゆすめて
はすみよの後姿を見やつて、いろ／＼お詫せ
はしあ掛けた。

かうとかそろひ、とか簡單は受け容へてしは
事よ詰の方へ氣を取らしめた。おみよめ、
かうは文典の暗記をしてゐた。おみよめ、

49

承知して來る澤はないんぢやあね。あんなに
 お容色かしいんだから、篠程いこ所へ縁付かせ
 るつめりでおたんで親^{おやぢ}せのよ、
 他の子供も自分自分の膝下へ歸^{かへ}寄^よせられた
 り、強いて不^{しやう}知^しはら以後^い月々の仕事^{お_き}送^{お_{くり}}りを
 しないと争^{あら}はれないと云つて來てゐるらしい。
 祖母^{おばあ}さん姑^{おばあ}の娘^{むすめ}は今度のことがあつ

45

50

てニヤ／＼笑^{わら}つてゐる。祖母^{おばあ}さん^(は)最初の間^(ま)
 はいきり立つて、先方^{せんぱ}の男^{おとこ}は會つて強^{つよ}いこと
 を云つたんでせうげやどね。今更取返^{とりがへ}しのつ
 くことやほ^ほし、あんまり此^こかう^{かう}告^ごいこ
 とを云つてこの上^{うへ}二人^{ふたり}は無分別^{むぶべつ}な娘^{むすめ}をやせ
 たりやね^ねはいと心配^{じんぱい}し出し、今かや二人^{ふたり}を
 底^{そこ}つて正式^{せいしき}に結婚^{けつこん}せせるやうす、朝鮮^{こ_ざせん}の父^お
 婆^{おば}つん^お夫^お合^あつてゐんですつて、おでめ、父親^{おやぢ}
 は子^こ煩惱^{ぼんのう}な上^{うへ}おきぬすやんは長く自分の側^{そば}で
 育ててゐたのだから、よし／＼と二つ返事^{へんじ}で

50

んを誘惑した男の人にまだ見ぬまではこのことと訊いた。

「ええ。」見たことはないけど、祖母せんや木も見たし、気を寄せた想像の出でてよ。

頗立つて柔らかな人なの。~~は~~は朝廬すずくの名前は

略語のそくごく面白そろな人なの。~~は~~は朝廬すずくの名前は

前まではまだ世間ふ知らゆるは今年は文展へ出でますけれど、繪画は

上やうすはんべでせり。て今まから捕つかげてますのであります。

下へ下りつて停ひ止む。配するやうに一端すこしあり。

せよみね
方の三崎としの海岸へ行くことみなつへぬ、
きぬすやんも隨へ行くことみなつへぬ。
娘の強がよく纏まるまでは坐と講義してお
たじりてせよみね。男でも女でも傍の者よ
は遠慮しねりで。好きなことをしていい。めんでせ
よか。せよみておてもよと氣が咎めないんでせ
よかね。おみよは自由な振舞を理解では是ぜ
がね
(十行廿字) 伊東製

事のほけす

53 篫

認してゐながら、
から腰下りた女のやよ思はせておたのであ
つた。
「祖母そんは先日貴女のことを承りておまし
たよ。おみよそんは一人で東京のみなつしゃ
るのによく変つたことが起らぬいものだつて。
不可思議そよ云つておふんじよ
國の親御そんむ田ん却りかいへつて、不可思議
せよ云つておふんですよ
りふんじよと、おみよは鼻ふかせ寄せて微

53 乾

りて來たので、詰は自から外へ移つた。おま
きはお茶を入せたりお菓子を出したり
して、今夜の演説會の番組の出でる新聞を
搜出して、興かつた口を開いた。(の)記事
は遊藝の好きな彼女は、新聞を見ても、そ
れが足を運んで自分が耳目で見聞きしたこ
とは、滅多なくつづめ、紙上から得た印象す
は富んでゐた。

(2)面白くはなぞうだ妝と、

54 乾

笑いた。
だから笑い、貴せのことを祖母せんの前で自
慢して來たのよ。貴せむ暇もあつたのな
ら、一度おみへ遊び入つしやいな。そして、
祖母せんの慈歎を聞いへか上げなさい。功德
みはりますよ」
中
近がみ 行つて見たないと思つてゐるんですけれど、もん
面倒な な内輪をせせりや拂返事み因る
ここへ唐午時から醒めたり主婦が
二階から下が

57

乾

頭から

子並み見られてゐるのを、自分の價值を傷つ
 けられいやろみ感じてゐた。おまきから聞えら
 し聲間をしてゐる考え深い女のやろみ奉つ
 らると却つて操つたい思ひ甲かせしたが、従兄
 が一時起つて、先達の家へ出たが、従兄
 ヨリ夫人はラジオの発見者ではほいか。じ
 リーは英國第一流の学者が
 エリオットは

53

56

乾

主人は新聞を一瞥して、出演者や出し物を
 聽いたつて初まらないよ。おみよは詣の種
 す一度以上も聽いたつてい
 分かりやすまいけれど、
 の母ふんと、おみよは先づそのやろみ鼻
 小さな皺を寄せて微笑した。それで、従兄が母間
 がくとみつらても藝術みつらても、さうむ理り
 解を有つてゐない女すやろみ自分を見做して
 ねるのと不公平を覺えてゐた。精めすると色々
 (十行書学)伊東局製

52

19
の席を占めへゐるのりで、おみよは極りの悪
い思ひをした。自身を振りふり(?)あまり氣きむか
ないが、彼女め、生れて初めて都會の歡樂場
の身を置いたりで、自分が(?)の田舎臭い風態
を鏡かがみ映して見ゆやうは気がした。純元すか
らしみ前へ出入りしてゐる都令の人に達の豪奢
な生活へ出た。が、舞臺で演せりやたいろくの音曲や落
語や講談は、は取して興味を刺戟し、
かつた。醉つてゐるやがまも初めはが
彼女のの3又舞聽極きどり

ではないかと、この頃日暮に垂筆録してゐ
る空漠たる夢夕が、おみよの胸むねよりも残のこして身光を
放つて、りゆであつた。
夕餐は東洋軒で食へることにして、三人は
早目家はやめを出た。従兄いこは平生の散歩同様の
気持きめいであつても、女達めのだつはるかに、よ心こころの躊躇じゅう
を感じてゐた。
暑しょ中の演藝會で、有振ありふた顔振おもてふたの
で、有樂座の客席きやせきは淋れいかつた。ゆ、華美けいび
な服装ふくわざをした聽衆きようしゆ極きはめが我わは顔おもてして周

61 乾

お遊べるのか知りはいか、強いて理解したい
 の夢の世界としふ願望は起らなかつた。
 従兄は一つ二つ、聽残して座を出たがつ
 わたか、がまきは減多み來る
 のだからと云つて動かなかつた。
 見て外へ出た時は、知らぬ間に空が曇つて
 おて、大粒な雨がぽつぽつ落して来た。停留
 所までひた走りよ走つたが、見かけ二人ほ
 うなあいよの足が一晩健やか

60 乾

てゐるオマセのが不思議で、あと自身す
 はおいろ退屈でならなかつた。英字を一つ贋
 え難解な辞句の一節を難解を得たほどの樂
 み得らむなかつた。
 あの奥中はのが音藏ですよ。聲がいこでせ
 3.とかまもみづかせられ、と氣のなし近
 事をしてゐた。そして、卫教師の英強の發聲
 みがへつて音聲の快感を得らるやうに思
 つてゐた。(開) 駒(馬) 繼度也たら、あんは音曲の
 面白味が理解せゆて、音はと同じやうみ歡樂

「おまき、書間はセラでめなげど、寝床へ入る
とお母さんのことか露出せられてはらはいの。そ
して、松まや文也がお母さんと可愛がられて
ると思ふと、憎らしくなることがあります
よ。おの可愛がうかる分までお母さん取らるん
でありますと、寝物語りをした。
みよやんむ女ね、もんは可憐らしくこと
を云つて
可憐らしくもはいわ。
の。弟なんかじぬけば時々はばお母さん

おまきのやうは息苦しさは覚えなかつた。
で、おまきで電車を下りると、荷物を手籠上げて坂路
を一気で駆上つて家へ歸つた。
お母さんを入って裁事の批評をしほがら一休み
してから、寝床に就いたが、従兄だけが二階
より寝て、おまきはおみよと今夜は階下で一
つ蚊帳のなかで眠つた。おみよは母の家の狭い部へ
屋で寝床は淋しい思いをして、一人寝て
するよりは少しほど寝心地がよかつたか知れ
ばかつた。

66 乾

知せが明日す
かつた。老いゆるし日頃病気勝手でもあ
る母親だけを現世の守り神として、遙かに争
頗りよしてゐるのは心細かつた。

何時まです
迷惑からゆるか気ふはつた
降の手傳へはじめて、朝覲後まつと
新聞の讀んで、煙たし従兄の起

(四) 64

65

は私一人のものとなるんだから。そしたら
か母がそんと東京へ来て貰つて、二人で家事を
一軒持つか、室借りをするかしら
う、そこ幸福だらうと思ふのは叶ひの
たつてか母さんはもろ餘程年歳を取つてゐ
らつし貴婦のやるんぢやない。
ええ。……和あ母さんはもろ自分の年齢
も都不知道は忘れてしまひたいや
かみよはこの姫愛を獨占したいとそへ思つ
てゐる母親が、
危篤だよ
死したがりかいふ報

(十行廿字) 伊東屋製

68 乾

りと過厚を受け行いやうは場所として空
想み游んだ。もしよりも、従兄の家に置い
て貰つて、襷かけて拭掃除をしたり浦飯焚き
の手傳ひをしてから、柳葉勉
の間々おまきと打融合詰をして、
先頃りはい心を慰められたかつた。おまき
はをり一國は從兄の嫁は取り難いとつけ
明るいゆえに其家へ行くたゞみ叔母の家とは異つた
中ども空気が漂つてゐるやうだ。

(能くほしす)

(十行廿字) 伊東屋製

63

69 乾

て來ない前より暇を告げた。
「休暇中東京をおらつしやるんなら、時々か
遊びに入つしやいな。」の中もとつとん飛へ
お説ひしますよ。帝劇が歌舞伎を見せて
上げたいわね」と、おまきが帰りかけと云はせ
たが、おまきよは己心を悦しいとは思はないが、
た。他人よは歡樂の世界かも知れぬが、
昨日経験したやうな歌舞音曲で微塵も現脱が
すこゝり出来ばい
舞伎とかめ、たゞ田舎臭い身替りは振ふ
あんな自分は、帝劇とか歌舞伎が

(十行廿字) 伊東屋製

64

70 乾

み目めを醒ますと、
 7 と3のしなせんしたと、
 7 て食ませながし入つて來た。
 7 崑づろかしまして
 7 仰山麿をやありませんか。書日
 あるんぢやうと
 7 叔母ば寝果顔を見らるのが厭せよ、
 7 へ向ひて怖い夢の跡を追つてねたが、叔母ば
 悪親切な縛り口調で、ちの氣を掛かぬこそせ
 る

65

69 乾

あつ食て、自分の部屋へ帰るて一層強気す周
 囲みが見えのだつたか、誠驗後で妙強の張合
 た。
 7 あか
 7 脱いはしか、目が俄か下また悪くはつたや
 3 で、頭脳^(頭脳)は蜘蛛^(蜘蛛)の巣^(巣)が張つてゐるやうは
 不快快^(不快快)せせ贋^(あほ)えた。
 7 て、机の上^(机)は黒虫^(黒虫)ねた兩
 生の上^(生)は額^(額)を當つて、3と1としておたがす
 3と2は夢ばかりが彼女^(彼女)を齧^(齧)つた。
 7 あか
 7 と呼ばゆる幽^(幽)かな聲^(聲)
 7 と呼ばゆる幽^(幽)かな聲^(聲)

64

92 乾

やうで無氣味だつた。
勢ひのいひ日光セヘ、庭と見えほく
すがゆ知らはんと思ふと、夏の暑い日光
みも不思議は懐してせ覽へた。
故郷からは孽資専を入るだけ透つて呉りと
うするし、貴女は男めかはんほどよ一心す
免強じとぬりなせるんやだから、申分はない
んやけり。おみよせんくうぬなやか
女子が親衛先許を離れて一人で居ると、得
ていろんに苦勞が渦りへ出るのです。がは。

67
68

91 乾

別食気も掛けたことあります。た
機で胸を壓ふておましたから;
そせはらしくけれど、風扱があるんはさ
やつと机も明して涼質じは。以前とは貴女の
様子が違ひます。やうみ和は腕んで居ります
この鉢はなぜ何が分かるゆのかと
おみよは沈黙の中を反抗してねたが、先モ見
た日の潰れた夢は、自分の将来を暗示した
と云ふ。

66
67

乾

卷之三

96 乾

出るまで二年間も親の家の二階の一室に住んでいた。そこで外へは出歩く富てもないのに、たまたま何でもない譯だったが、實際はそこは行かばかりだ。

「おみよさんは寝ておひきを思はせられた。幼い頃の頃内閣の山野の親んでゐたお隣で體格はがつりしておいて、二年三年都合の埃風を嘗つたつてひくともし

97 乾

から、叔母の言葉は彼女の誇りを傷つけた。自らが歸省の妻をも儀物をして、此家で幸抱して勉強しやうとしてゐるのが、傍の目では浮気は沙汰ふ取られるのか知らんと口惜しかつた。姫して、この二疊の部屋があります／＼居りで三日で四日でも暮した。上京の許しの終日家す闊籠つて机の前よりさかつと座つて學校通りの外へは出歩く富てもないのに、たまたま三日で四日でも暮した。

78 乾

セ出だした時分は、おみよは渴日をもつて喉を
清水を恋慕するやうな気持であつた。
貴女の帰都令のようし時分何時でも入つ
しやしませ。おまき申して居りますと、折返
しておまきの返事が來たが、その後へ、お出
での節みは貴女の寝具を持つて奉て頂けます
まいから書類添へてあつた。
寫眞のないおみよは、
一人写しのでは、田舎の女學生卒業當時の
しか持つてゐなかつたので、
田舎如何とも

73 乾

77 乾

73でなかつたが、首から上乃是書変化の跡
の水が見られた。臍脂は白筋つけ無い顔も、都邑
無邪氣で脚筋は筋肉はやしたが、生氣を失つて
といた脚は顔全體を陰鬱にするやうな感
々感覚められた。
「おぬ子せんのことゆ承まりたく、いろく
かう張りしたくことゆ浦産りますから、一ゆか郭
處み上りたくなりりますが、お差まはあります
お知ら下さりませ」と、おまきお當てて葉書

72 乾

80 乾

ものややは、いと、思つて窓邊へ、窓邊
 面から自分の気象や魂を推量しやてはなは
 いと、自ら重んじておたが、しかし、この際
 みこそ東京のいと窓邊屋で自分の姿を撮せ
 た。し密望が珍しく起つた。
 たゞ、芝へ行く途中でふと目つした窓邊屋
 やも、氣の利いた身着をした姿形の
 璃越しよ飾り立てねる見本の窓邊を見よと、
 美しい男女ばかりであつたので、今書物の中

99 乾

娘らしく窓つてゐるものやを人見せつゝは、
 流石に厭な気がしたが、兎も角持つて行く
 とおいて行李の中から取出した。おまきせん
 はたゞの物好ゆから見たがるのか、そやとゆ
 何かゆ用なことがあるりか知らんと疑ふ
 月つてゐると、従兄の口から戯談半分よ、いと
 加減は先で諦め早く嫁み行け、かやが女
 をしてやうとかと屢々云つてゐたことが思
 出せやうだ。
 寂眞の交換で云ふことはことを極めしよとゆる
 車大ば

